

國學院大學學術情報リポジトリ

Toraikei-Shizoku in Man'yoshu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kajikawa, Nobuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000042

『万葉集』の渡来系氏族

— 梅花宴を例として —

—

『万葉集』には数多くの渡来系氏族の人が登場する。その認定には異説も多く、人数を確定することは困難だが、概ね五十人ほどだと考えられる。一方、『万葉集』に登場する人名の総数も、かなりの誤差が見込まれるが、伝説の主人公などを除き、実在した人は六百余人であろう。とすれば、渡来系氏族の人は全体の約八パーセントということになる。法務省の統計によれば、平成二十五年までの十年間に、日本に帰化した人は

十三万人余り。総人口の約〇・一パーセントに過ぎない。古代の渡来及び帰化は数百年にわたるものなので、もちろん単純な比較はできない。しかし、八パーセントという数字はかなり重い、と見るべきであろう。

彼らが『万葉集』の中でどのように位置づけられているのか。また、『万葉集』が形成される母胎の一つとなった八世紀の律令官人たちの宴席の場で、彼らがどのような役割を果たしたのか。古代における歌文化の実態と、『万葉集』の形成を考える上で、それは避けて通れない問題であろう。

とりわけ、大宰府における大伴旅人の周辺には、百済系渡来

梶川信行

氏族の出身者が多い。その点についてはすでに論じたことがあるのだが、本稿では、天平二年（七三〇）正月、大宰帥の邸宅で行なわれた梅花宴（巻五・八一五〜八四六）に出席した渡来系氏族の人々に注目し、その問題を考えてみたいと思う。

略称の人が多いこともあって、ここでも厳密な数字を出すことは困難である。とは言え、議論の分かれる人をも含めると、渡来系の可能性がある人は十指に余る。そうした彼らの歌々に注目することによって、天平期の歌の場がどのようなものであったのか、そこで彼らはどのような役割を果たしたのか、その点を考えてみたいと思う。また、そうした考察を通して、『万葉集』の形成に関する一つの側面も浮き彫りにできるのではないかと考えている。

二

その出席者は、以下の三十二人である。彼らは官位と職制に基づき、A上座（巻五・八一五〜八二二）、B陪席（巻五・八二三〜八二七）、C下座（巻五・八二八〜八四六）に分けられて、その席が与えられていたものと考えられる。

A 大式紀卿	少弐小野大夫	少弐粟田大夫
筑前守山上大夫	豊後守大伴大夫	筑後守葛井大夫
笠沙彌	主人	
B 大監伴氏百代	少監阿氏奥嶋	少監土氏百村
大史氏大原		
C 大判事丹氏麻呂	薬師張氏福子	筑前介佐氏子首
壹岐守板氏安麻呂	神司荒氏稲布	大令史野氏宿奈麻呂
少令史田氏肥人	薬師高氏義通	陰陽師儀氏法麻呂
算師志氏大道	大隅目榎氏鉢麻呂	筑前目田氏真上
壹岐目村氏彼方	対馬目高氏老	薩摩目高氏海人
土師氏御道	小野氏国堅	筑前掾門氏石見
小野氏淡理		

渡来系氏族であることが判明する者と、渡来系であろうとする説のある者には傍線を付したが、彼らが本稿の検討対象となる。

Aのグループ八人の中では、周知のように、筑前守の山上大夫、すなわち憶良に渡来人説がある³⁾。しかし、憶良渡来人説には異説もあり、小稿で扱うには議論の経過が複雑に過ぎる。論旨が拡散してしまう恐れもあるので、今回は考察の対象とはし

ない。ということ、渡来系氏族の人として検討すべき対象となるのは、筑後守の葛井大夫一人ということになる。

『続日本紀』養老四年（七二〇）五月条に、「白猪史の氏を改めて葛井連の姓を賜ふ」と見える。また『日本書紀』欽明天皇三十年（五七〇）春四月条には、

胆津、白猪田部の丁者を検へ閲て、詔の依に籍を定む。果して田戸を成す。天皇、胆津が籍を定めし功を嘉して、姓を賜ひて白猪史とし、尋ぎて田令に拝けたまひ、瑞子が副としたまふ。

と伝えられている。『日本書紀』の欽明天皇三十年（五六九）正月条によれば、この胆津は王辰爾の甥とされる。すなわち、葛井連氏は百済系の渡来氏族であったことがわかる。六世紀にはすでに渡来していた氏族であった。

『新撰姓氏録』（右京諸蕃下）によれば、葛井連氏は河内国志紀郡を本拠地としていた。先進の学問を伝えた家柄であったとされる。確かに、葛井連氏には、知的エリートが多い。たとえば、『万葉集』は葛井連広成の名を伝える（巻六・九六二）が、この人には『経国集』（巻二十）に、「白広成」の名で対策文二

篇がある。その対策文によって式部省の秀才の試験に合格し、官人として出身したのであろう。『懷風藻』に、漢詩二首（一九、一二〇）も残す。また、天平十八年（七四六）正月の雪の肆宴には、諸会（巻十七・三九二五）の姿が見える。広成同様、『経国集』に対策文二篇を残す文章家であった。さらには、天平八年（七三六）の遣新羅使一行には子老がおり、『万葉集』に長歌（巻十五・三六九一―三六九二）がある。

大成は旅人の帰京後、わざわざ悲嘆する歌（巻四・五七六）をなしている。題詞には単に「作歌」とあり、「贈」とはされないが、『万葉集』に掲載されているのは、大伴家に届けられたからに違いない。文人的な旅人と、歌を通じた交流のあったことが窺える。文雅を好む人物だったのであろう。

またBのグループ五人の中では、大典の史氏大原が渡来系であろう。⁶「史氏」は史戸氏と見られるが、『新撰姓氏録』（撰津国諸蕃）によれば、百済の都であった漢城の人漢氏鄭徳の後とされる。朝廷の文筆を掌る部民である史戸の子孫と、その部民を管掌していた。⁸いわゆる百済系の「古い帰化人」である。

大原は伝未詳だが、大典（正七位上相当）の職掌は「文案を勘署し、稽失を検へ出し、公文読み申さむこと」（職員令⁶⁹）。梅花宴の当日も、その職掌に準じて、次々と披露される歌を記

録する立場にあったと考えられる。¹⁰大原は、その役割にふさわしい氏族の出身であり、ポストにあった。

また、少典山氏若麻呂も渡来系である。天平二年(七三〇)六月、大伴旅人が枕席に疾苦し、遺言をしようとした時に、同族の稲公と胡麻呂が大宰府に下向しているが、その帰京にあつたての宴席で、少典(正八位上相当)の山口忌寸若麻呂が歌をなしている(巻四・五六七)。山氏若麻呂がこの人であつたことは確実である。

周知のように、忌寸は渡来系氏族に与えられた姓だが、『新撰姓氏録』(右京諸蕃)によれば、若麻呂を生んだ山口氏は、倭漢氏の一支部とされている。いわゆる「古い帰化人」だが、正史に登場するのは、『続日本紀』和銅七年(七一四)閏二月初の兄人が嚆矢。木曾路の開通に関わる褒賞であつた。

『続日本紀』にはほかに、大麻呂・佐美(沙彌)麻呂・田主・人麻呂・家足といった山口忌寸氏の人の名が見える。大麻呂は文武四年(七〇〇)六月、大宝律令の撰定メンバーの一人として、その名が見える。また田主は、養老五年(七二二)正月、佐為王らとともに、皇太子の教育係の一人に任じられている。

『家伝下』(武智麻呂伝)に神龜の頃の暦算の名家とも見え、『続紀』養老五年(七二二)正月条には、「竿術(算術)」の山口忌

寸田主とされる。当時の名立たる文人・学者の一人であつた。

また人麻呂は、天平勝宝四年(七五二)正月、遣新羅使に任じられている。このように、山口忌寸氏は葛井連氏と同様、知的エリートをしばしば輩出した家柄であつた。

Cのグループには、渡来系氏族と見られる人が多い。まずは薬師の張氏福子である。これも『姓氏録』(右京諸蕃)によれば、張氏は後漢靈帝の裔。福子は一般に、『家伝下』に「方士」としてその名に見える張福子だとされる。薬・医術の知識を持つ学者であつた。¹¹系譜は不明だが、『続紀』には唐人・渤海人などに張姓が見られる。また、現代の韓国・北朝鮮にも張姓が存在する。漢系か半島系かは不明だが、渡来系であつたことには違いあるまい。¹²

次に、壹岐守の板氏安麻呂である。これは一般に、『令集解』(学令書学生条)の「古記」に「神龜二年三月十四日、太政官処分貢書生者板茂連安麻呂」と見える安麻呂と同一人とされている。¹³確かに、時期と官位に矛盾はなく、その可能性は極めて高い。

『続紀』によれば、板茂(板持とも)氏は、養老三年(七一九)五月に連の姓を授けられているが、それ以前は板持史であつた。書記を職掌とする家柄である。『姓氏録』(河内国諸

蕃)に伊吉連と同祖とあり、長安の人劉家楊雍の後裔とされる渡来系氏族。安麻呂については、『続紀』天平七年(七三五)九月条に、従六位下であったことが見えるものの、それ以外に知られることはない。

少令史の田氏肥人は、筑前目の田氏真上と一緒に検討しなければならぬ。この二人については、同族だったからこそ、誤解のないように、同じ略称を用いたのであろう。とすれば、田辺氏・田口氏・田中氏などが「田氏」の候補となるが、田氏真上については田辺史真上であろうとする説がある^⑭。真上は天平十七年(七四五)十月に、「諸陵大允従六位上」であったことが知られるが、『姓氏録』(右京諸蕃下)によれば、田辺氏は漢王の後裔の知摠から出たとされる。とすれば、真上は漢系の渡来氏族の出身であり、やはり文筆に関わっていたことになる。

しかし、筑前目は従八位下相当の官だから、もし田辺真上だとすると、この人は十五年間で九階昇進していたことになる。異例の出世であり、可能性は低いと言わざるを得ない。とは言え、『万葉集』には福麻呂・秋庭といった田辺氏の人たちが登場する。肥人についても一応、田辺氏である可能性を探っておく必要がある。

次に薬師の高氏義通だが、これも対馬目の高氏老、薩摩目の

高氏海人と一緒に考えなければならない。古代において、「高」のつく姓は高丘・高階・高田・高野・高橋・高向・高安など、数多く見られる。ところが、海人の歌は対馬目の高氏老の歌(巻五・八四一)の次に置かれ、同じ記名形式で、薩摩目高氏海人とされている。両者は区別する必要がなく、同族だったからこそ、同じ形式で並べられたのではないか。

『続日本紀』天平勝宝二年(七五〇)四月条に、「正六位上高向村主老に外従五位下を授く」とする記事が見える。高氏老とは、この高向村主老ではないかとする説がある^⑮。近年も、それを肯定的に受けとめている注釈書が多い^⑯。少初位上相当の対馬目から異例の出世を遂げたことになるが、そうだとすれば、海人も高向氏だったということになる。

高向村主氏は『新撰姓氏録』(右京諸蕃)に、魏の武帝の太子、文帝より出たとされる。同じく『姓氏録』(未定雑姓)には、呉の国、小君王の後とも伝えられる。また、『続群書類従』(巻百八十五)所収の『坂上系図』に引く姓氏録逸文には、高向村主氏の祖は阿智王とともに渡来した七姓漢人の一ともされている。とすれば、朝鮮半島から渡来した人々の末裔であった。

義通は「薬師」とされ、典薬関係の業務に携わっていた人で

あった。大宰府の官人たちの職掌に関する規定（職員令69）の中に「医師二人」と見え、「掌。診候。療病。」とされている。中央では典葉寮の職掌だが、その「医師」の一人であろう。『書紀』の天智十年（六七〇）正月条によれば、白村江における敗戦で、大率渡来した百濟人たちの中に、鬼室集信や徳頂上のように、「葉を解れり」という理由で重用された人が多い。その点からも、義通が渡来系の高向氏であった可能性は高い。最後に算師の志氏大道だが、『家伝下』に「曆算」の専門家として志紀連大道の名が見える。算師の大道は、この人に違いない。

志紀連は、『新撰姓氏録』（大和国神別）に神饒速日命の孫、日子湯支命の後裔とされる。その本拠地は河内国志紀郡志紀郷。現在の藤井寺市内の国府を中心とした地域である。¹⁸ 渡来系支族の多い土地柄だということもあって、志紀氏は西漢系の帰化人、すなわち百濟系の氏族であろうとする説もある。¹⁹ しかし、志紀連の人物はほかに見えず、積極的に渡来系だとする史料はない。『姓氏録』に従って、神饒速日命の後裔と見た方がいいのではないか。

以上、渡来系氏族の出身であることが確実な人は、葛井連大成、史戸大原、山口忌守若麻呂、張福子、板茂連安麻呂の五人

ということになる。また、判断を保留した山上憶良を別として、その可能性はあるものの、断定できない人は、志紀連大道を除く五人である。最低でも、全体の一六パーセントほど。最大に見積もると約三一パーセント。憶良を含めると三四パーセントほどとなる。海外への玄関口となっていた大宰府という土地柄が原因かも知れないが、これはやはり、その意味をきちんと考えてみなければならない数字であろう。

三

梅花宴が催されたのは、正月十三日。その日は太陽暦の二月八日にあたる。²⁰ 序文によれば、その日は穏やかな天気であった。梅が満開となり、香気を漂わせていたのである。一同は庭に出て、膝を突き合わせて盃を傾けた。「翰苑」（序文）を標榜する和やかな宴会であったことが窺える。そこで、この宴の「主人」の旅人が一同に歌を作ることを求めたのだが、葛井連大成はその上座の一員であった。それは次のような歌である。

梅の花 今盛りなり 思ふどち 挿頭にしてな 今盛りなり
り
(巻五・八二〇)

一点の曇りもなく、この日の宴席のめでたさを謳歌する一首である。周知のように、「思ふどち」とは気の合った者同士の間意。社交の場における常套的表現である。一回の中に親愛の気分を醸成する役割を持つ。現実には、厳然たる身分秩序の中で、身分を超えて、親愛の気分を共有することは難しかったと思われる。しかし、「思ふどち」という表現が、「膝を促け」（序文）という旅人の呼び掛けに応じたものであったことは確実であろう。心からの賛辞か否かは別として、その宴の目的を適切に捉えた歌だと見ることはできる。「嫌味はないが如何にも形式的な歌だ」という辛口の評もあるが、こうした社交の場にふさわしい一首であったと言つてよい。

また、二句と五句とを繰り返すのは古歌謡の形式であり、それは音楽的な遺風だとされる。古式に則つたうたいぶりのその歌は、管弦と舞などを伴つて、ゆつたりと詠出されたと想像する向きもある。確かに、旅人は琴を嗜んでいたことが窺える（巻五・八一〇～八一二）。したがって、この宴で管弦と舞が披露された可能性は否定できない。とは言え、それと歌の披露は別ではないか。その歌は、大典もしくは少典によって、ゆつたりと読み上げられたのだと見ておきたい。

そもそも、一座の口火を切つた紀卿の歌は、

正月立ち 春の来らば かくしこそ 梅を招きつつ 樂し
き終へぬ
(巻五・八一五)

という一首であった。「樂しき終へぬ」という言挙げは、「主人」の意を汲んだ開宴の辞として、適切なものであったと考えられる。大成の歌は、そこで求められた〈樂しさ〉を謳歌したものである。それは、紀卿の提示したこの宴のあるべき姿を、肯定的に受けとめた歌だと見てよい。表現の巧拙は別として、やはりこの場にふさわしい一首であったと見做すことができる。

史戸大原の歌は、それから六人後に披露されたもの。

うち靡く 春の柳と 我がやどの 梅の花とを いかにか
分かむ
(巻五・八一六)

という一首である。上座では、栗田大夫（巻五・八一七）と笠沙彌（巻五・八二二）が「青柳」をうたっていたが、陪席でも直前の少監土氏（巻五・八二五）が「青柳」を詠んでいる。大

原の「柳」の歌は、それを受けたものである。「梅」をうたうのは当然のこととして、「柳」をうたった上司たちの歌をも意識した一首であろう。

周知のように、梅花宴の歌々には、つとに表現の連鎖が認められて来たが、確かに陪席の五首（巻五・八二三～八二七）には、表現の対応と連鎖を見て取ることができる。まずは、初句が「梅の花」という形の歌が三首並んでいる。それは、上座にあった少弐の小野大夫と粟田大夫の同じ形の歌（巻五・八一六、八一七）を受けたものである。その上で、「散る」が大監伴氏百代の歌（巻五・八二三）から少監阿氏奥嶋の歌（巻五・八二四）へ、「園」が奥嶋から少監土氏百村の歌（巻五・八二五）へ、「柳」が百村から大典史氏大原の歌（巻五・八二六）へ、「春」が大原の歌から少典山氏若麻呂の歌（巻五・八二七）へと受け継がれている。次々と新しい語が取り入れられ、それが身分秩序に基づいて、下僚の歌へと受け継がれて行く形である。このように、陪席の人たちはその表現を連鎖させつつ、上座の歌に同調することによって、宴席の場に融和の気分を醸成しようとしていたように見える。下座の歌々にこうした連鎖は見られないが、陪席の人たちはいずれも大宰府の官人である。事前の打ち合わせが可能だった、ということか。大原もその一人

として、同調と融和を意識した歌を披露したのだと考えられる。

少典の若麻呂は、陪席者の末席に位置していたのであろう。

若麻呂はその席で、日常の職掌に準じて、木簡に認められて提出された歌々を次々と記録し、読み上げていたものと思われる。その一方で、次のような歌を披露している。

春去れば 木末隠りて うぐひすぞ 鳴きて去ぬなる 梅
が下枝に
(巻五・八二七)

「梅」と「うぐひす」という取り合わせだが、この宴席で初めてそうした歌をなしたのは、少監の阿氏奥嶋であった。若麻呂にとつて、同じく陪席の上司である。

梅の花 散らまく惜しみ 我が園の 竹の林に うぐひす
鳴くも
(巻五・八二四)

という一首だが、この時「うぐひす」を詠んだのは、若麻呂が二人目であった。三人前に披露された奥嶋の歌は、当然若麻呂の記憶に残っていたものと思われる。

ところが両者には、「竹の林」で「鳴く」「うぐひす」と、「梅」の「木末」から「下枝」に「去ぬ」「うぐひす」といった違いがある。内容的に共通するところがない。奥嶋と若麻呂は旅人の直属の部下として、旅人の主宰する雅宴に伺候することも、たびたびあったと想像される。「梅」と「うぐひす」という取り合わせが、宴席の雅となるということ、かねて知っていた可能性もあろう。それもあって、奥嶋は事前にそうした歌を用意していたのかも知れない。

ところが、若麻呂の歌の「春去れば」は、どこにかかつて行くのか、わかりにくい。「鳴きて」であろうが、「木末隠りて」が挟まることもあって、すんなりと意味が通らない。この日たまたま、帥の邸宅を訪れたウグイスは、「木末」に「隠りて」いたので、鳴いている姿が見えなかった。そうこうしているうちに、「鳴きて」「下枝」の方に移動したらしい。そういう様子をつたっているのであろうが、しっかり推敲ができていないようにも見える。その点からすれば、若麻呂は奥嶋が「梅」と「うぐひす」の歌を詠んだので、これだと思つてその場であわてて創作した、という可能性もあろう。

一方、その取り合わせは、末席の人々の歌に集中的に見られる。彼らは、梅花宴以外『万葉集』に登場しない。また、大宰

府以外の官人も多い。したがって、宴席歌を詠むことに、必ずしも習熟していなかったのではないか。彼らは奥嶋と若麻呂の歌によって、宴席の風雅の一つの形が「梅」と「うぐひす」の取り合わせだということを知つたのであろう。

大宰府あたりでウグイスが鳴き始めるのは、三月一日頃とされる。²⁷ところが、この宴が開かれたのは、太陽暦の二月八日。年によって誤差はあろうが、やや早過ぎる。したがって、「うぐひす」を詠むということ予想していなかったのであろう。ところが、意外にも、帥の邸宅の庭にウグイスが訪れた。「梅」と「うぐひす」の取り合わせが、宴の雅となることを承知していた若麻呂は、上司の奥嶋の歌を受けて、急遽そうした歌をなしたのではなかったか。

「うぐひす」を詠んだ歌は、下座の志氏太道（巻五・八三七）以後の歌に集中する（巻五・八三八、八四一、八四二、八四五）。若麻呂の歌が披露されてから、彼らの歌が披露されるまで、十分な時間があったものと思われる。そこで、せっかく訪れたウグイスに合わせて、次々と「うぐひす」を詠む歌が生まれたのではないかと考えられる。

そう考えてよいとすれば、若麻呂はその場の空気を読んで、機敏に対応したことになる。表現の巧拙は別として、気働きが

必要な陪席の一員として、その責任を果たそうとしていたのだと見てよい。

さて、張福子の歌は、次のような一首である。

梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりに
てあらずや (巻五・八二九)

この「咲きて散りなば」は、序文の「詩に落梅の篇を紀す」を受けたもの。陪席の人たちも〈散る〉ことをうたっていた(巻五・八二三、八二四)が、福子は「主人」旅人の序と、〈散る〉ことをうたう上座の歌々(巻五・八二六、八二二、八二二)を意識していたのであろう。

とは言え、旅人が「我が苑の 梅の花散る」(巻五・八二二)とうたっているにも関わらず、これは仮定である。北九州一带におけるハクバイの満開は、通常二月の下旬だが、この宴は太陽暦の二月八日。しかも、この日の天候が穏やかであったことも窺える。何枚かの花びらは、はらはらと散っていたのかも知れないが、全体としてはまだ散る状態ではなかった可能性が高い。大伴百代が「梅の花 散らくはいづく」(巻五・八二三)と疑問を呈していることを前提に、旅人の歌を筆頭とする落梅の

歌を虚構とする説もある²⁹。とすれば、これも序文に示された課題に応じて作られた歌だということになる。

三句目以下は、たとえ梅が散ってしまったとしても、次の機会があるということ述べている。「常識的なことに過ぎない」と、にべもない評もあるが、その時はまた伺候します、という意を、当然含んでいよう。福子は大宰府管下の役人だが、こうした宴席でもっとも重要なことは、その長官であった「主人」旅人に対する配慮であろう。次もあります、というこの歌は、高貴な「主人」に献ずる歌として、適切な配慮を含んでいると見てよい。張福子の姿はここ以外に見られないが、表現の巧拙という物差しではなく、身分秩序を前提とした社交の場の歌として見れば、それは十分合格点のつくものだったのではないかと思われる。

続いて、板茂連安麻呂の歌を見てみよう。

春なれば 諾も咲きたる 梅の花 君を思ふと 夜も寝なく
 (巻五・八三一)

大宰帥の邸宅のウメが暦に合わせてきちんと咲いたことを、「諾」と納得しているのだ。ウメを「君」と呼び、擬人化して

いるが、これについては、梅をこの日の主賓として見方もある。³¹⁾「梅を招きつつ」(巻五・八一五)に基づく見方が、梅も我々の一員として、というほどの意と見た方がよからう。「主人」はあくまでも旅人である。したがって、さすがに大伴卿のお屋敷のウメ殿で、なるほど風流を弁えていらっしやる、というニュアンスであろう。

この歌も、近代の辛口の歌人には「形式的である」と切り捨てられていたが、こうして「梅」を擬人化した点が、この歌の最大の特徴であろう。暦の通り見事に咲いたウメに対して「諸」と賛辞を送り、それを受けた下の句は、そのお蔭で眠れない、というオチにしている。宴席は和やかな笑いに包まれたのではないか。その場の雰囲気に合わせて、十分に楽しんでいることを示しており、そつのない一首であると言つてよい。

このように見ると、近代の歌人の評価は別として、渡来系氏族の出身であることが確実な五人は、総じて宴席の気分をきちんと捉えた上で、気配りを見せつつ歌を披露していた、と見ることができる。少なくとも、いずれも上司の機嫌を損ねるような歌でなかったことは確実である。当時の律令官人としては、それで十分に役割を果たしていたと言えるのではないか。

四

一方、渡来系の可能性はあるものの、断言できない五人は、どのような歌を披露しているのか。いずれも下座の人たちだが、まずは少令史の田氏肥人。次のような一首である。

梅の花 今盛りなり 百鳥の 声の恋しき 春來たるらし

(巻五・八三四)

すでに述べたように、北九州においてハクバイが満開になるのは二月の下旬である。したがって、二月八日のこの宴で、実際に「盛り」だったのかどうかは微妙である。しかし、「盛り」であったか否かは別として、大宰帥主催のこの宴を寿ぐためには、建前として、こう詠むことが適切であったと考えられる。しかも、この初句と第二句は、葛井連大成の歌(巻五・八二〇)とまったく同じである。そうした形で上座の歌に同調することも、この宴を寿ぐことになると考えた結果に違いあるまい。

また、「百鳥の声」も春を象徴する景物である。額田王の春

秋競憐歌の「冬隠り 春去り来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ」(巻一・一六)を思い出させる。末尾の「らし」は、「梅の花 今盛りなり」という事実を根拠とした推量である。これも、実際にたくさん鳥が訪れていたか否かは、必ずしも関係あるまい。あるべき姿をうたったものであるう。

このように、社交の場の歌としては、たとえどのような状態であろうとも、その日を肯定的に詠まなければならぬ。それが、大宰帥の邸宅の庭に対する讚美となり、また、こうした催しを主催する「主人」に対する讚美ともなったと考えられる。この歌については「類型的」だとか、「適切なもの」とは云へない⁽³⁵⁾などとする評もある。しかし、宴を寿ぐ下級官僚の歌としては、適切なものだったと見てよい。続いて、薬師高氏義通の歌である。

春去らば 逢はむと思ひし 梅の花 今日遊びに 相見
つるかも
(巻五・八三五)

右は、肥人の歌の次に披露されたものだが、大宰帥の邸宅の「梅の花」を擬人化したものである。「梅の花」の擬人化は、四人前に披露した安麻呂の歌(巻五・八三一)を受けたものと見

られるが、それを特別なものと見做しているであろう。かねてからその「梅の花」に逢いたいと思っていたが、待望の「今日」という特別な日に逢うことができた、という感動をうたっている。もちろん、この宴の主催者である大宰帥に対して、感謝の意を示したことになる。宴席における下僚の歌として、適切な一首だと見ることができぬ。

「春去らば 逢はむと思ひし 梅の花」という上の句は、過去の思い。そして、「梅の花」が上下を繋ぐ形で、「梅の花 今日遊びに 相見つるかも」という現在の感慨が詠まれている。三句目に「梅の花」という句が置かれていることが、実に効果的である。

次に、筑前目の田氏真上の歌。

春の野に 霧立ち渡り 降る雪と 人の見るまで 梅の花
散る
(巻五・八三九)

「散る」梅を詠んでいるが、これも実際に散っていたか否かを詮索する必要はあるまい。それは序文の「請はくは落梅の篇を紀せ」を受けたものであろう。また、四句目の「人の見るまで」が、

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来
るかも (巻五・八二二)

という「主人」の歌を意識したものであることも確実である。直前の歌(巻五・八三八)は「うぐひす」を詠んでいるのに、真上の歌には詠まれていない。真上は、旅人の与えた課題とその歌のみを意識していたのであろう。

初句と第二句は「第三句の「降る」にかかる」とする説と、第五句にかかるとする説とがある。仮に後者に従うが、前者の案も捨て難い^⑤とする注がある。しかし、この歌は木簡に認められ、「主人」の旅人に献呈された歌を、陪席の官人が口頭で披露したものだったと考えられる。第二句は連用形の中止法だから、そこで息が継がれた可能性が高い。とすれば、声の歌を聞いた人たちに迷う余地はなかった、と見るべきであらう。

とすれば、一同の者は、その段階で、春の野に霧が一面に立ち込めている様子を思い浮かべたはずである。そして三句目以下を聞いた時、あたかも「降る雪」のように、大宰帥邸の庭で、はらはらと散っているウメをイメージしたことになろう。すなわち、外の景の五七と、内の景の五七七である。

とは言え、この歌群を都で、文書の形で受け取った吉田宜(巻五・八六四〜八六七)は、違った受け止め方をした可能性もある。第五句にかかるとする理解は、文字に定着した歌を読んだ時に、初めて可能になるものであろう。梅花宴の参加者たちが読み上げる声を聞いて理解したことと、後に都の吉田宜が、文字で書かれたその歌を読んで理解したこととは、必ずしも同じではなかったと考えなければならない。

なお、霧と霞は気象現象としては同じものだが、周知のように、平安時代以後、春は「霞」、秋は「霧」と固定化した。『万葉集』の用例も概ね固定しているが、これは例外の一つ。『万葉集』中、真上の歌はこの一首のみ。定着しつつあった作歌の慣例を知らなかったのであろう。それほど作歌に習熟していなかった、ということではないかと思われる。

四人目は、対馬目高氏老である。

うぐひすの 音聞くなへに 梅の花 我家の園に 咲きて
散る見ゆ (巻五・八四一)

当該歌には、肥人の歌(巻五・八三四)を受けたものとする説^⑥と、榎氏鉢麻呂の歌(巻五・八三八)を受けたものとする説^⑦

がある。しかし、「うぐひす」はすでに四首（巻五・八二四、八二七、八三七、八三八）に詠まれている。「梅」が「散る」ことも、先行する歌々（巻五・八一六、八二二、八二二、八二三、八二四、八二九、八三八、八三九）に見られる。また、直前の村氏彼方の歌（巻五・八四〇）と同じく、三句目に「梅の花」という句を置いている。特定の歌を意識したものと見るよりは、宴席全体の雰囲気踏まえた上で、進行状況をも見据えつつ、披露されたものであったと考えた方がよいだろう。

「我が家の苑」（巻五・八一六、八三七）「我が園」（巻五・八二二、八二四）という表現が、先行する歌にすでに見られる。したがって、これは老の自宅の庭ではなく、帥の邸宅の庭園を指し、帥の邸宅の庭を「一同われらの詩の園」と見做すことがこの日の出席者全員の了解事項になっていたとする見方がある。⁴⁰

その一方に、「主人」の立場でうたったものとする見方もある。とは言い、どちらにせよ、この宴の参加者たちは当然即妙に歌が詠めた、ということが前提となる。ところが、老にはほかに歌が見えない。また、「梅の花」を擬人化した歌も見られる中、「うぐひすの声」（巻二十・四四五）ではなく、「うぐひすの音」というのは、やや無粋ではないか。それは、言葉の選び方の不適切さと見るべきであろう。あるいは、単に古歌を利

用したための齟齬と見るべきか。いずれにせよ、作歌に対する習熟度が高かったと見ることはできないように思われる。

最後に、薩摩目の高氏海人の歌を見てみよう。

我が屋前の 梅の下枝に 遊びつつ うぐひす鳴くも 散
らまく惜しみ
(巻五・八四二)

かつて「チラマクラシミは普通に見られる擬人であるが、やうるさい⁴²」とする評もあった。また、「主人に對する挨拶の心を婉曲に現はしてあるものであつて、上の〔八二四〕の竹林に鳴く鶯と全く同工異曲である。かうした形が既に一つの型となつてゐたかと思はせるものである⁴³」とする評もある。しかし、「うぐひす」を擬人化することも、「挨拶」の「一つの型」だと見てよい。社交の歌にとつては、同調することによって、融和の気分を醸成することが重要である。これは、そうした目的に沿った形式に基づく一首だと見ることができよう。

このように見て来ると、下座の彼らが渡来系氏族であったか否かは別として、総じて「主人」の設定した宴の趣旨に何とか対応しようと努力していた、と見ることができよう。文人的な資質を持つ人が少なかったためか、やや熟さない表現も散見され

たが、宴の雰囲気を壊すほどの失敗作ではなかったと思われる。とすれば、「翰苑」を標榜する雅宴に、多くの官人たちが最低限の対応はできた、ということになる。天平初年の大宰府には、こうした文化的な環境が整っていたと見てよいだろう。

五

右がすべて自作の歌であったか否かは、不明と言うしかない。とは言え、しばしば歌会を催す上司を持てば、梅花宴のような催しが予定されていた時には、その下僚は無理をしても歌を用意しなければならぬ。事前に誰かに作ってもらった歌を持参した者がいても、決して不思議ではあるまい。微妙に季節感のずれの見られる歌があるのも、そうした理由によるのではないか。また、予め用意して来た歌を、その場の状況に応じて、多少手直した歌もあったかも知れない。参加者たちは総じて、宴の趣旨に賛同し、できるだけそれに対応しようと努力していたと見られるが、やや熟さない表現もあった。その場で臨機応変に十全な歌が詠める者ばかりではなかったということであろう。

渡来系氏族と言っても、自ら海を渡って来た人は一人もいない。むしろ、数百年にわたって、この列島で生活して来た氏族の出身者の方が多い。家系のレットルは渡来系でも、彼らが長年にわたって古代国家の形成の一翼を担って来たことは間違いない。また、その第一言語が当時の日本語であったことも疑いがない。

平城京を中心とした文化の一つに、宴席における歌の披露があったが、そうした社会的慣習の生成と成熟に、彼らも貢献して来たことが窺える。陪席の大典と少典は渡来系氏族の出身者だったが、とりわけ文書の作成は、渡来系の職掌だった。歌が文字化され、歌稿として残されて行くことに関して、彼らの貢献を忘れてはなるまい。歌集が形成される母胎となった歌稿の蓄積にも、彼らの果たした役割を過小に評価することはできない。

渡来系と断定できなかった人たちも、梅花宴では、その趣旨に適った歌を披露しようと努めていたと認められる。また、この宴に参加した人は、当然のことながら、渡来系氏族でない人の方が多い。彼らも「相継いで詠をなして、乱れぬ体系を完結した」⁽⁴⁾とまでは言えないものの、概ねその場にふさわしい歌を披露している。その点は改めて確認しなければならないが、両

者を比較すると、渡来系の人たちに特有の傾向は見られない。むしろ、その事実こそ、彼らも歌文化の生成と成熟の一翼を担ったことの証ではないかと思われる。とは言え、それについては機会を改めて論ずることにしたい。

注

- (1) 拙稿「東アジアの中の『万葉集』——旅人周辺の百済系の人々を中心に——」(『国語と国文学』八六巻四号・二〇〇九)。
- (2) 拙稿「『万葉集』の宴席を考える——梅花の宴を通して——」(『語文』一四三輯・二〇一一)。
- (3) 土屋文明「旅人と憶良」(創元社・一九四二)、渡部和雄「憶良の前半生」(『国文学』解釈と鑑賞一三四巻二号・一九六九)、中西進「憶良帰化人論」(『國學院雑誌』七〇巻一・一九六九)、同「家系」(『山上憶良』河出書房新社・一九七三)など。
- (4) 青木和夫「憶良帰化人説批判」(『萬葉集研究 第二集』塙書房・一九七三)、井村哲夫「憶良伝一斑——世に出るまで——」(『憶良と虫麻呂』桜楓社・一九七三)、佐伯有清「山上氏の出自と性格」(『古代東アジア史論集 下巻』吉川弘文館・一九七八)、同「憶良は天智朝の渡来人か」(『国文学』二五巻一・一九八〇)など。
- (5) 大久保廣行「葛井氏の歌詠と伝統」(筑紫文学論 大伴旅人 筑紫文学園 笠間書院・一九九八)。
- (6) 佐伯有清「新撰姓氏録の研究 本文編」(吉川弘文館・一九六二)。
- (7) 賀茂真淵「萬葉考 九」は「史の下に部を略げるか」とするが、諸注はそれを引用する。『続日本紀』に登場するのは、史戸氏である。
- (8) 関見「史部」(『国史大辞典』第十二巻) 吉川弘文館・一九九一)。
- (9) 関見「東西の史部」(『帰化人』至文堂・一九六六)。
- (10) 注2に同じ。
- (11) 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉「藤氏家伝 鎌足・貞慧、武智麻呂伝 釈と研究」(吉川弘文館・一九九八)。
- (12) 武田祐吉「増訂萬葉集全註釋五」(角川書店・一九五七)。
- (13) 鹿持雅澄「萬葉集古義」。近年でも、井村哲夫「萬葉集全注 巻第五」(有斐閣・一九八四)、小島憲之ほか「萬葉集②」(新編日本古典文学全集)(小学館・一九九五)、伊藤博「萬葉集私注三」(集英社・一九九六)、阿蘇瑞枝「萬葉集全歌講義三」(笠間書院・二〇〇七)、多田一臣「萬葉集全解2」(筑摩書房・二〇〇九)など、多くの注釈書がその可能性を示唆している。
- (14) 小島憲之ほか「萬葉集②」(新編日本古典文学全集)、多田一臣「萬葉集全解2」など。
- (15) 東京帝國大學史料編纂所編「大日本古文学書二」(東京帝國大學・一九〇一)。
- (16) 竹内理三ほか編「日本古代人名辞典 第四巻」(吉川弘文館・一九六三)。
- (17) 小島憲之ほか「萬葉集②」(新編日本古典文学全集)、伊藤博「萬葉集私注三」、佐竹昭広ほか「萬葉集一」(新日本古典文学大系)(岩波書店・一九九九)、阿蘇瑞枝「萬葉集全歌講義三」、多田一臣「萬葉集全解2」など。
- (18) 「大阪府の地名Ⅱ」(日本歴史地名大系)(平凡社・一九八六)。
- (19) 平野邦雄「畿内の帰化人」(『帰化人と古代国家』吉川弘文館・一九九三)。
- (20) 岡田芳朗ほか編「日本暦日総覧 具注暦篇 古代中期1」(本の友社・一九九三)。
- (21) 土屋文明「萬葉集私注三」(新訂版)(筑摩書房・一九七六)。
- (22) 武田祐吉「増訂萬葉集全註釋七」(角川書店・一九五七)。
- (23) 大久保廣行「梅花の歌三十二首」(神野志隆光ほか編「セミナー万葉

- の歌人と作品 第四卷「和泉書院・二〇〇〇」。
- (24) 伊藤博『萬葉集釋注三』。
- (25) 土居光知「『万葉集』卷五について」(『古代伝説と文学』岩波書店・一九六〇)。
- (26) 注2に同じ。
- (27) 大後美保『季節の事典』(東京堂出版・一九六一)。この本は、温暖化が問題となる高度成長期以前のデータに基づいている。その点で、万葉の時代の季節感を考える上で、十分参考になるものと思われる。
- (28) 注27に同じ。
- (29) 澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第五』(中央公論社・一九六〇)。
- (30) 注21に同じ。
- (31) 菊川恵三「梅花の宴試論——宴席歌・季節歌との比較から——」(『萬葉集研究 第三十一集』塙書房・二〇一〇)。
- (32) 注21に同じ。
- (33) たとえば、齋藤茂吉『万葉秀歌 上』(岩波書店・一九三八)は、梅花宴の歌を一首も取っていない。根本的に物差しが違うのであろう。
- (34) 注21に同じ。
- (35) 窪田空穂『萬葉集評釋 第四卷「新訂版」』(東京堂出版・一九八四)。
- (36) 小島憲之ほか『萬葉集②』(新編日本古典文学全集)。
- (37) 注2に同じ。
- (38) 伊藤博「園梅の賦」(『萬葉集の歌人と作品 下』塙書房・一九七五)。
- (39) 青木生子ほか『萬葉集二』(新潮日本古典集成) (新潮社・一九七八)。
- (40) 注39に同じ。
- (41) 多田一臣『万葉集全解2』。
- (42) 注21に同じ。
- (43) 注35に同じ。
- (44) 注24に同じ。